

運営委員に就任して

◇運営委員に就任して

国立循環器病センター研究所 放射線医学部

宇山 親雄

1992年6月、わたしは始めてSRを利用した実験に参加した。それをさかのぼる約3年前の1989年2月にわたしが呼びかけ人となったSRの医学利用サブグループが発足した。この2つのことからの時間的順序は一見奇妙である。このことはわたしのSRへの関わり方に起因している。

この事情を簡単に述べると、関西へSR施設を誘致するための「関西SOR計画世話人会」の幹事のひとりとして国立循環器病センター研究所前所長の仁村泰治先生が参加しておられたことが発端である。わたしが放射線医学部を担当していたことがきっかけとなり、1988年5月に開催された現在の「SPring-8利用者懇談会」の前身である「次世代大型X線光源研究会」に出席することとなった。

わたしは1985年2月以来、前記研究所で医用画像処理の研究に携わっていた。これまでは医療用のX線管球が発生するX線を照射した画像を研究対象にしていたが、SRのようなX線ははじめてであった。

わからないことばかりの世界に頭を突っ込み、その上世話役に推されたためにわたしはいつも後ろに身を引くような姿勢をとり続けていたように思う。しかし、前述のSRの実験に参加することにより、ようやくそれが少しずつ消えていくようになった。50才を過ぎてからの新しい研究分野への参加であったため、実験を行ってうまく運ばないとき、それを解決するための直感力はやはり情けないことにはほとんど働かなかった。こんな時はひたすら、仲間がこの事態をどのように捉えているかに耳を傾け、理解することに集中するより他に方法はなかった。

このような経験を重ねながら、医学利用SGの世話役を8年間程務めたため何となく格好が付いてきたのかも知れない。とうとう当懇談会の運営委員に選ばれることになる。5月11日にわたしは始めて運営委員会に出席した。

運営委員会に出席してまず感じたことは、新しい情報がすみやかに入ってくることである。例えば、SPring-8の建設の現状はもちろんの事、共同チームの現状も適確に理解できる。さらに、ビームライン建設に協力したSGには、SPring-8完成後、ビームラインの優先的使用権が有りや否やといった最も関心の高い問題も議論され、SGにとってはいちばん知りたい点が直ぐ伝わるという利点がある。これまでもSGの世話人には、必要な情報はもたらされていたが、やはり一方的に流れてくる情報と、質疑応答ができる場での情報の量は格段に異なるように思う。ということは、少なくともSGの世話人までは同質の情報が流れるのが望ましいように思われる。せめて運営委員会の報告は、重要な質疑応答を含めて「光彩」にすみやかに掲載されることを希望する。

それでは運営委員となったわたしはこれからの2年間何を志すのか。上に少し述べたよ

うな、SPring-8に関して知りたいことを明らかにしていくことが第一の役目ではないかと思う。SPring-8利用者懇談会は利用者の利益団体であるという観点に立って、ビームを提供する側、すなわち高輝度光科学研究センターに対し、利用者の立場から種々の要望を出したり、意見を述べたりするのが第一義的使命であろう。

わたし個人にとっては、そのほかにSR利用を広く理解する場が与えられたと思っている。今まで医学利用に限られた狭い世界でその中身を理解することで精一杯であったが、これからは少し視野を広げて他の分野の研究も理解するよう心がけたい。

◇SPring-8 利用者懇談会の運営委員に就任して

関西医科大学 教養部

木原 裕

夢の光の実現を愈々来年に控えて、今期初めて懇談会の運営委員に選出された。従来の先輩諸氏の御努力にただ引っ張られてきた今までに感謝するとともに、共に力を合わせて世紀の事業の実現にいささかでも貢献できることを願っている。第一回の運営委員会に出席して、私の役割をと考えてみたとき、やはりlife science を適正に進めていくことかなと思って眺めていた。構造生物学については、既に安岡、月原さんが活躍されているし溶液散乱については重鎮の植木さんが居られる。したがって狭い意味では、私の役割はX線イメージングの分野との橋渡しということになるが、同時に筋収縮、蛋白質のフォールディングなど種々の分野についても多少とも話のできる存在であれば良いと思っている。

まず当面感じるのは、個々のビームラインのことではなく、その後方にあたる生物試料の調整室についてである。PFの場合でも、生物試料の調整は他の分野と異なった配慮がされている（充分ではないが）。蒸留水、分光器、遠心器、極低温冷凍器など生化学的な道具が整っていること、器具の洗浄や排水の問題など、生物実験のできる場所を実質的に確保していく必要がある。また特に外国から来るユーザーのことも考えると、実験の前後に1週間程度滞在できる実験室があることが望ましい。SPring-8のSatellite unitである。計画が現実のものとなる日が近づくにつれて、このような付属施設の重みが増してくる。全てのユーザーに開かれたSPring-8であることの意味を段々重く考えなければいけないのだろう。

また、生物研究の場合、重要なのは、必ずしも装置に習熟していないユーザーを広く開拓していく必要性である。放射光研究は、つねに他の研究法との競合の上に成り立つ。このことは、溶液散乱、X線顕微鏡、筋収縮研究などの場合に特にいえる。SPring-8利用者懇談会がつねに新しいユーザーを暖かく迎え入れる開かれたsociety で在り続けることができるかどうか、それがSPring-8が生物学として大きな貢献ができるかどうかのkeyではないかと思っている。

関係各位の御叱責をいただきながら、微力を尽くすつもりですので、どうぞ宜しくお願いいたします。